

資料 3-2：植生指標による個体数調整事業の評価方法について（密度操作実験候補地）

作成：さっぽろ自然調査館

（業務委託：環境省釧路自然環境事務所／北海道森林管理局）

1. 基本的な考え方

現在密度操作を検討しているルサ-相泊地区と幌別-岩尾別地区では、先行する知床岬地区での成果を踏まえて、植生の回復状況を効果的にモニタリングする。

2. 評価方法の候補

現在進めているモニタリング調査の手法と箇所については、資料 2-2p.17 以降を参照のこと。対象地は風衝草原などの希少種を含む群落や、大規模な平坦草原などがなく、調査手法は制限されるが、岬地区よりアプローチが用意であり、季節ごとの反復数の多い調査には適している。

① 草原植生

- ・現存量の回復・・・簡易柵による刈り取りまたは草量計による現存量の推定

利用頻度の高い二次草原(耕作放棄地、法面など)で実施する。

- ・不嗜好植物の減少、嗜好植物の増加・・・固定区による植生調査

アメリカオニアザミの減少、クサフジ・オオヨモギ・エゾイラクサ等の増加を把握する。

② 森林植生

- ・稚樹の増加・・・带状区のエンドウ調査

早期の把握のため、ササ類が少なく母樹のある林分で実施。

- ・下枝・葉量の増加・・・带状区のエンドウ調査または葉量ラインの設定

- ・林床の嗜好植物の増加・・・带状区のエンドウ調査

チシマアザミ・オオアマドコロ・エンレイソウ類・サラシナショウマなどの繁殖確認で評価。

3. 今後の課題など**① 草原植生**

- ◆ 今後も同じ地点で春または初夏、夏または秋と刈り取りを実施して、採食量と現存量の推移を追跡する。長期の利用には小型金属柵が適している。
- ◆ 岬地区の例で見ても、刈り取り結果は安定しないことがあり、草量計の方が適切かもしれない(今年度は本地区では未実施)。ただ草量計も単純なバラつきが大きい手法で、反復数を増やす必要があり、場所も同一の植生で平坦で安定した調査ラインを設定できる場所が必要である。

- ◆刈り取りも草量計も、イネ科草本群落を単一の量で評価するが、そのなかには10種程度が含まれ、選好性、成長特性、栄養価などに違いがあると思われるため、個体数調整への反応が大きく変わってくる可能性は否定できない。

②森林植生

- ◆林分の特性が評価項目の推移に大きく関わるため、場所の選定が重要となっている。
- ◆変化に時間を要するため、管理計画に直ちにフィードバックできないが、草本群落と評価が異なってきたときの調整方法を検討しておく必要がある。
- ◆いずれの植生についても、夏季の利用が想定されるため、下記のエゾシカ密度の推定もあるほうが望ましい。季節移動が少ないという想定であれば、越冬個体数や捕獲事業時の確認頭数で推定しうる。